The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ソグド語雑録(IV)
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 1995, 10, p. 67-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18453
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ソグド語雑録 (IV)

吉田　豊

0 はじめに

本稿は「ソグド語雑録 (III)」(『内陸アジア言語の研究』V (1989), 1990, (91－107頁) の続編であり，ソグド語に関する雑多な問題を扱う.[0]

1 動詞 B'W と過去不定詞の構文

動詞 ß'w と過去不定詞の組合せは従来3例知られている．それらは次の通りである．どれも動詞 tys「入る」の過去不定詞 tγty を支配している.[1]

(1) ywn'yδ trš'nt (kw) [knδh] s'r 'xw rwstmy m'yδ kw knδßr prm 'škr'k šw' γrß MN pršp'r myr'nt 1–LPw xršy'kh ß'w'nt tγty 'wyh knδyh ZKw knδßrt ßynt'nt ... (Pelliot sogdien 13, 1–4 ; N. Sims–Williams, *IIJ* 18, 1976, pp.54, 56)

「(悪魔たちは)すぐさま城へと逃れた．ルスタムはかくして，城門まで追いかけて行った．多く(の悪魔たち)は踏みつけあって死んだ．1000匹がかろうじて (?)・・・し，城門を閉じた．」

(2) xw 'ßc'npδ'ykt ''pt c'nw kw sm'wtry s'r (')[wpt'nt] s't rwš'nt ZY šr'kr'yt 'ys'nt yw'r Z(Y) [c'](nk)w ß'w'ynt wδ'yδ cntr t(γ)ty rty (šn) [ZK šr'k ZY x](w) rwš' s('t) ['nc'yt] ... (W. Sundermann, *Ein manichäisch–soghdisches Parabelbuch*, BTT 15, Berlin, 1985, p.22, ll.37–40)

「この世の河川は大海に落ちる場合には，すべて (音を立てて) 流れ，音を立てながらそこに達する．しかしそこの中に・・・すると，その[音や]流

---

(0) 引用されたソグド語のテキスト中の [角括弧] は，完全な破損部を，(丸括弧) は文字の一部が残っている部分的な破損部を示す.

(1) 文脈が明らかになるように，やや長めの引用になっている.

れはすべて［止むのである］」

(3) rty c'ß xtw mrtxm'yt ptn[wy ptn]wy ß'w'nt tγty rty kt'r pr nγ'wš'kyh Z(Y) kt'r pr 'rt'wyh 'wšt'ynt ... (Sundermann, *op. cit.*, p.24, ll.75–77)

「どれほど多くの人々が新たに・・・しても，聴者あるいは僧侶階級の中に（適切な）位置が定められる」

かつて Sims–Williams が上記の (1) の例を翻訳した際，Gershevitch は問題の部分を「どうにか入ることができる」と訳すことを提案し，ß'w はこの場合「近づく」を意味する語ではなく，「足りる，十分である」を意味する別の動詞であるとした.(2) Gershevitch は (2) と (3) の例でも同じ解釈を提案した．一方 Sims–Williams は，(2) でも (3) でも「どうにか入ることができる」という訳は文脈に合わないだけでなく，「足りる，十分である」を意味する ß'w が支配する不定詞がいつも tγty であるのは奇妙であり，ß'w は「近づく」を意味する動詞であろうとした．Sundermann はこの Sims–Williams の提案に従って，問題の部分を "sich nähren, (um dort) einzutreten" と翻訳した.(3)

筆者はこれらとは別に，既に発表された資料のなかに同じく動詞 ß'w と過去不定詞の組合せがもう 1 例あることに気付いた．しかもその例では支配された動詞は pr'ys/pr''γt「到着する」であり，tys/tγt– ではない.(4)

(4) rty ZK wyttr c'wn rxwšn'γrwδmnwh c'δrs'r rty 'xw zγ'rt ß'w pr''γt kyw'yδ RBk δxšth 'kwty 'xw swδ''šn šw'y 'skwn 'ßyz'xwk rty 'wδ pr wrz <wn'> mz'yx knδh 'PZY γrßy kr''mth 'PZY mz'yx ''ph 'PZY γrßy xwrtßrch wn'kh ZY znkznk'n 'sprγm'w ZY γrßy mγδ'kw ZY γrßy mrtxm'yt ZY 'stwr–pδ'k ... (E. Benveniste, *Vessantara jātaka*, Paris, 1946, pp. 53–54, ll. 828–836)(5)

---

(2) Gershevitch *apud* Sims–Williams, *ibid.* 参照.

(3) Sundermann, *op. cit.*, p.43 参照.

(4) しかしながらこの場合も，同じ語根から派生した移動を表す動詞であることは注意すべきである.

(5) Benveniste, *op. cit.*, p.95 の提案に従って，wn' を補った.

「彼（＝帝釈天）は天国から下界に向けて出発した．彼は急いでスダーシャンが苦労して進んでいるその砂漠に・・・した．そしてそこで奇跡を起こし，大きな城，多くの村，大きな河川，多くの果樹，種々の花，多くの果物，多くの人間や家畜を現した」

Benveniste は ß'w を「近くに」を意味する副詞であると考え，問題の箇所を"et parvint rapidement au grand désert"と翻訳した．しかしソグド語に ß'w という動詞が存在することと，上の３つの例を参考にするならば，ここでも同じ構文が用いられていることは疑いない．

ところで(4)の例では，主語となっているのは ''δßγ すなわち帝釈天であり，「どうにか到着することができる」という訳は問題にならない[(6)]．また「近づいて入る／到着する」あるいは「入る／到着するために近づく」と訳すことは，入ったり到着したりする場合には，必ずその対象に近づくことになるのであまり意味がない．さらに (2) や (3) の例では，河川や人々が，音を立てるのを止めたり聴者あるいは僧侶階級のどこかに地位を定められるのは，各々大海やマニ教教団に入ってからのことなので，その点からもこの訳は受け入れ難い．

ところでソグド語で過去不定詞を支配する動詞は，''γ'z「始める」，ßr'γ'z「始める」，k'm「欲する」，prm'y「命令する」など特別な意味を持っており，この例でもかなり限定された意味範囲を想定すべきかと考えられる[(7)]．それ故筆者はこの構文を「～するとすぐに，～するや否や」と訳してみてはどうかと考えている．すなわち：(1)「・・・城に入るや否や城門を閉じた」；(2)「・・・その中に入るや否や，その音や流れは止むのである」；(3)「・・・新たに(教団に入っ

---

(6) ''δßγ が「インドラ」に対応することについては，H. Humbach, "Vayu, Śiva und der Spiritus vivens im ostiranischen Synkretismus", in: *Monumentum H.S.Nyberg*, I, Acta Iranica 4, Tehran-Liège, 1975, pp.397-408 を参照せよ．

(7) Y. Yoshida, "On the Sogdian infinitives", *Journal of Asian and African studies* 18, 1979, pp.181-95 参照．なお ß'w「十分である」から派生した形容詞 b'wwny「～できる」が，前置詞 pr と現在語幹からなる不定詞を支配している例が知られている．Yoshida, *art.cit.*, p.191 及び N.Sims-Williams, *The Christian Sogdian manuscript C2*, BTT 12, Berlin, 1985, p.77 参照．

ても)入るや否や・・・に位置が定められる」; (4)「・・・砂漠に到着するや否や，奇跡を起こし・・・」のように，「～するとすぐ」は上の4つの例のすべてで文脈にふさわしい翻訳であるからである．しかし依然として，何故この構文が基本的に同じ意味の動詞 tys「入る」と prys「到着する」にだけ認められるのかという疑問は残る．(8) また「～するとすぐ」の翻訳が正しいとしても，本動詞の ß'w が「足りる，十分である」を意味するのか「近づく」を意味するのかが明かではない．さらにその意味が派生する経緯も不明である．(9)

2 サンクト・ペテルブルグの『僧伽吒経』の原典

最近 G. Canevascini は，懸案であったコータン語の『僧伽吒経』の再校訂を行った．(10) その際彼は，コータン語の写本だけでなく，ギルギットで発見されたサンスクリットの写本も発表し研究者の便宜を図ってくれている．彼の報告によればコータン語の写本は全部で27種類，サンスクリットの写本は7種類存在する．そして前者は字体などから5－8世紀頃のものと考えられ，後者は6－7世紀頃のものであるという．またコータン語訳は5世紀前半には作成されていたという．(11)

一方漢訳された『僧伽吒経』は3種類存在している．このうち『大正』No.423は538年の訳であり，同 No.424 は10世紀の訳である．(12) また『宋蔵遺珍』に収め

---

(8) M6807にみられる ß'w p(r')γt もおそらく同じ構文の一部であろう．M. Boyce, *A catalogue of the Iranian manuscripts in Manichean script in the German Turfan collection*, Berlin, 1960, p.127 参照．しかし残念なことにこの断片の文脈は不明である．

(9) 「近づく」から派生したとすると，「～することに近づく」＞「～しそうになる」＞「まだ完全に～していない (ときに)」のような経緯を想定できるかもしれない．

(10) Canevascini, *The Khotanese Saṅghāṭasūtra*, Wiesbaden, 1993 参照．なおこの経典の研究の歴史に関しては R. E. Emmerick, *A guide to the literature of Khotan*, Tokyo, 1992, pp.29–30 も参照せよ．

(11) Canevascini, *op. cit.*, pp.xii–xv 参照．

(12) Canevascini, *op. cit.*, p.xii 参照．

られたものは完本ではないが，宋代の訳に違いなく上記の No.424 とあい前後する時代のものである．[13] 従って，伝存する漢訳のなかでは No.423 がコータン語やサンスクリットの写本と近い時代のものである．実際に内容を比較してもそのことは明らかで，これらは互いに非常に近い関係にある．これに対して後の２つの漢訳は，相当増広された部分がある一方で，省略された箇所もあり，両者に共通し他の３つの資料と相違する部分が多い．そしてこれらの資料から，『僧伽吒経』のテキストの地域・時代による差異の幅の概要が知られる．[14]

『僧伽吒経』はソグド語にも翻訳されており，現在までのところ３種類の写本が発見されている．それらはサンクト・ペテルブルグに保管されているクロトコフの収集品のうちの２種類の写本（L38, etc. 及び L8）と，ベルリンに保管されているトルファン・コレクション中の１種類の写本（So20165=TIIIŠ313, etc.）である．[15] 現在までのところこれらには，内容的に重なり合う部分は知られておらず，互いに独立した訳なのか同じ訳の異なる写本なのかを決定することはできない．[16] ソグド語訳の『僧伽吒経』を比定し，上記の３種類の写本が存在することを発見したのは Sims–Williams であるが，彼ははっきり対応箇所を特定できるL38等について当時知り得た梵本，チベット訳，コータン語訳及び漢訳と比較

---

(13) 『宋蔵遺珍』の資料の存在を筆者に教示された熊本裕氏に感謝する．

(14) チベット訳も考慮する必要があるが，梵本，コータン本及び漢訳と一致するようなので，ここでは考慮しないことにする．この点に関しては Canevascini, *op. cit.*, p.xvii を参照せよ．

(15) これらに関しては拙稿「ソグド語仏典解説」『内陸アジア言語の研究』VII (1991) 108頁参照．（以下「解説」と略す）．なおベルリンの資料はその整理番号から判断して，トルファンではなくショルチュクで発見された可能性が高い．このことについては Sundermann, "First results of cooperative work between Ryukoku University and the Academy of Sciences of GDR on Buddhist Sogdian Turfan texts", in: *The annuals of the Institute of Buddhist Cultural Studies Ryukoku University* 12, 1989, pp.12–18 参照．

(16) ベルリンの資料は未発表であるが，So20165のみは，1992年秋に調査し，漢訳に対応する箇所を比定した．拙稿「ソグド語仏典解説補遺」『内陸アジア言語の研究』VIII (1992) 137頁参照．なおL8は小さい断片で対応する箇所を比定できていない．

し，L38等はそのうちのどれともぴったりと対応しないことを明らかにした上で，ソグド語版は未知の原典からの訳あるいは，既知の原典からの相当自由なソグド語訳（あるいはむしろ翻案）であろうと結論した．(17)

上でも述べたように『僧伽吒経』のテキストの変異の幅はほぼ明らかになっているが，調査してみると現存するソグド語のテキストの内容は，その幅の範囲内には納まらないことが分かる．いま比較のために，L38等のテキストと Canevascini のテキストのセクションとの対応表を作ると下記のようになる．便宜のためにL38＋L39（全40行）を断片Ａと呼び，残りのL41等を接合したもの（全73行）を断片Ｂと呼ぶことにする．(18) また漢訳 No.423 と No.424 の対応箇所も掲げておいた．これらはここでは各々Ｃ及びＤと略し，『大正』のテキストの頁と段及び行数によって指定した．(19)

§196：A1–4；C69b5–10；D88c19–26

§197：A4–6；C69b10–12 (20)

§198：A7–9；C69b12–17 (20)

§§199–204：ソグド語版では対応する部分がない．

§205：A10–16；C69c28–70a8；D89b29–c9

§206：A16–24；C70a8–14；D89c10–20

§207：A24–27；C70a14–19；D89c20–23

§208：A27–33 (21)；C70a19–24；D89c23–90a1

---

(17) Sims–Williams, *BSOAS* 41, 1981, p.234 参照.

(18) テキストの接合状況に関しては Sims–Williams, *ibid.* 参照.

(19) 『宋蔵遺珍』所収のものでは対応する箇所が失われているので，ここには含められない．なお『大正』の頁数の百の桁は省略した．実際には数字の最初に９を加えると実際の頁数になる．

(20) Ｄでは対応する箇所が見あたらない．

(21) ちなみに32－33行目は次のように転写される：

c'wn cyw'yδ 'nß'nty 'M t'm'kh pr'yw y'r Z[Y] (33) cx''k wnty skwn rty ßγ prw pr'ywyδ šw ßγy xwt'w ẓ'n'ntk '(ß'?)

「この故に彼は私と喧嘩し争っているのです．神である王様はそのことをご承知下さい」ここでは šw は明らかに ßγy xwt'w にかかる冠詞であり，３人称単数の enclitic の代名詞と解釈することはできない．しかも直接引用の部分であり，この冠詞が２人称

§209：A34–40+B1–2[22]；C70a24–b5；D90a2–19

§210：B3–10；C70b5–9；D90a23

§211：B10–18；C70b9–13；D90a23–b2

§212：B19–30；C70b13–19；D90b2–10

§213：B30–35；C70b19–27；D90b10–23

§214：B36–56；C70b28–c11；D90b24–c15

§215：B56–63；C70c11–17；D90c16–27

§216：B63–68[23]；C70c17–23；D90c28–91a6

§§217–218：ソグド語版では対応する部分がない．

§219：B68–70；C71a11–17；D91a15–23

§220：B70–72；C71a18–22；D91a23–28

§221：B72–73[24]；C71a22–28；D91a28–b5

上記の対応状況からも理解されるとおり[25]，§§197–198のように，10世紀の訳である漢訳D本には対応する箇所がない場合がある．また一般的に言って，D

単数に関わるものであることが分かる．このような従来知られていなかった冠詞の存在と機能については Sims–Williams,"The triple system of deixis in Sogdian", *Transactions of the Philological Society* 92, 1994, pp.41–53 を参照せよ．

(22) §§209–210では，ソグド語版は独自の展開を示しているうえに，断片Bのはじめの部分の破損も著しく，対応関係がいまひとつ判然としない．§210はB7から始まっていると考えるべきかもしれない．なお文書の実物を調査したところ，Aの23行目に紙縫が見える．Bの断片からこの文書では1紙にほぼ23行が書かれていることがわかる．断片Bでは22行目のすぐ下に紙縫があるので，断片Bは紙縫付近から始まっていたに違いない．従って断片AとBの間にはさらに6行程が破損していることになる．

(23) ただしソグド語版では，はじめの薬上菩薩の世尊に対する質問（C70c17–19；D90c28–91a2）が欠落している．

(24) 破損がひどく対応は確実ではない．またその比定が正しいとしても，ほとんどの部分は破損していて，最初のごく一部が残っているだけである．

(25) ちなみに So20165（全19行）についても同様の対応表を作成しておく．ソグド語のテキストの略号はSoである．

§106：So1–5；C64c17–21；D83c11–17

§107：So6–12；C64c21–23

§108：So12–19；C64c23–29；D83c–84a3

ただしDのテキストとはかなり異なっており，ここで掲げた対応は便宜的なものである．

本との相違はかなり大きく，ソグド語版は梵本や漢訳Cなど早い時代のテキストにより近いことは明らかである．このことは注25で示したベルリンの資料でも言えることである．次に梵本や漢訳Cと比較すると，これらには存在するのにソグド語版には完全に省略されている部分(§§199–204；§§217–218)がある．(26) この部分は，テキスト全体の話の流れの中では話が比較的に込み入っている部分であり，省略してもストーリーの理解には支障がないといえるだろう．また対応部分が存在する場合でも，§205に典型的に見られるように，修行の段階を表すsrota–āpattiなどの教義に関わる術語は完全に省略されている．一方で一日で樹木が成長した話のように，分かりやすい物語的部分はかなり自由に拡張している．

このことからソグド語版の訳者は，梵本あるいは漢訳Cのような早い時代の『僧伽吒経』を原典として，教義に関わる部分や繁雑で分かりにくい部分を省略する一方，理解が容易で読んで(あるいは聞いて)面白い部分はかなり自由に拡張して翻訳したものと結論できるであろう．(27) 類似の事例は『華厳経』のソグド語訳にも認められた．そこでもストーリーの展開に関わる部分だけを抜き出し，非常に簡略な訳文にしていた．(28) つまりソグド語版と一致する内容の未知の原典を想定する必要はないと考えられる．ではソグド語版の訳者が原典として実際に利用したのはどのテキストであったろうか．内容面からこの問題に答えることは難しいが，ソグド語仏典の多くが漢訳仏典からの重訳であることを考慮す

---

(26) 前者については Sims–Williams もすでに気付いていた．Sims–Williams, *ibid.* n.3 参照．

(27) このことはSo20165に関しても言える．従ってもう一種のテキストであるL8についてもそうであったろう．つまり小断片であるL8に対応する箇所を特定することは困難なわけである．

(28) Yoshida,"Buddhist Sogdian notes", in: R. Schmitt and P. O. Skjaervø (eds.), *Studia Grammatica Iranica. Festschrift für H.Humbach*, Munich, 1986, pp.513–24 特に pp.517–18 参照．

れば，漢訳Cが原典であった可能性が最も高いといえるだろう.[29]

筆者はかつてソグド語仏典の原典に関する問題を論じた際，漢訳仏典を原典としながら，それを自由に翻案したソグド語仏典が存在することを明確に指摘することができなかった.[30] しかし『僧伽吒経』と『華厳経』はほぼ確実にそのような例であり，今後もこの種の事例が新たに発見される可能性がある.[31] 従って，漢訳仏典を原典にしたソグド語仏典には，原典に比較的に忠実で(ある場合には著しい直訳で原義が損なわれていることすら)あるものと，[32] それをかなり自由に翻案したものがあることになる．現在までに知られている例では前者の例が大半であったため，ソグド語仏典全体がそうであるような印象を与えてきた．残る問題は P[elliot sogdien] 2 のように，いくつかの漢訳仏典の抜粋をつなぎあわせて翻訳したテキストの成立に関わるものである．その種の原典が既に存在していたのか，あるいはソグド語訳の作者の手になるものかが分からない.[33] しかし今回のような事例から，ソグド人仏教僧侶が原典に対してかなり自由な改変を加えることができたことが判明し，そのことを考慮すると P2 のようなテキストも，ソグド人自身が編集した可能性が高いのではないだろうか.

3 ソグド文字のアルファベット

現在龍谷大学図書館に保管されている大谷探検隊将来のソグド語写本の中の

---

(29) ソグド語訳の成立や写本の時代に関しては，原典と考えられる漢訳Cの成立以降であることだけが明らかである．無論他のソグド語仏典と同様，7－8世紀ごろのものであると見なすことを妨げる証拠も存在しないので，当面その時代の成立と考えて良いだろう．最近筆者は巻子本の場合，紙のサイズと紙質によって，敦煌及びトルファンをはじめとする東トルキスタン出土のソグド語仏典の書写年代を，8世紀後半の唐の撤退以前と以後に分類できるのではないかと考えている．その点から言えば L38等は唐の撤退以後であり，So20165はそれ以前である可能性が高い．この問題については別に論文を準備中である.

(30) 「解説」101頁参照.

(31) 「解説」110頁 no.22(ii) の『薬師経』もこの種のテキストかもしれない.

(32) 「解説」97頁参照.

(33) 「解説」113－14頁 no.38 参照.

1点(No. 2502)は，ソグド文字を横書きとみて，横15.9cm・縦3.1cmで，すき縞のない紙である．奇妙な文字の羅列に見えるこの断片は，ソグド語のアルファベットを書き写したものであることが判明した．出土地の記録はないが，大谷探検隊の活動と，このコレクションの他のソグド語資料のほとんどがトルファン地区で入手されたものであることから判断して，これもトルファン地区で出土したものであろう．(34)

既にソグド文字のアルファベット表は何種類か発見されているが，それらは基本的に西トルキスタンで発見されたものであり，東トルキスタンで発見されるのはこれが初めてである．(35) 東トルキスタンではウイグル文字のアルファベット表は発見されているが，それらは本来のアラム文字からウイグル語の表記には用いられない5文字を除いた17文字と，新たに加えられた4文字から成り立っている．(36) ところでこの断片は22文字から成り立っているので，ウイグル文

---

(34) 他に楼蘭で発見されたと考えられる古い手紙の断片が1点知られている．このことは別に準備中の，同コレクション全体の報告書に発表する．

(35) 西トルキスタンで発見されるソグド文字のアルファベットには，ペンジケントの遺跡の発掘によって出土したものと，イスラム時代のアラビア語及びペルシア語史料中に引用されるものの2種類がある．前者は考古学者によれば8世紀前半のものと考えられるが，現在までに2点が発表されている．1つは陶片に書かれたものであり(V.A.Livšic,"A Sogdian alphabet from Penjikant", in: M.Boyce and I.Gershevitch (eds.), *W.B.Henning memorial volume, London*, 1970, pp.256–63, with 1plate 参照)，他の1点は骨片に書かれたものである(V.A.Livšic and V.G.Škoda, "Sogdijskie nadpisi iz xrama I v Penǰikente, in: *NAA*, 1982, pp.131–41 参照)．なお B. Maršak 氏が1994年10月に，筆者に口頭で伝えられたところによれば，この他にも数点のアルファベットがペンジケントで発掘されているという．後者には，Fakhr ad-dīn Mubārakshāh Marvarrūdī によるペルシア語の著作 *Ta'rīx-i Mubārakshāh* (A.D.1206) に引用されたもの(E.D.Ross and R.Gauthiot, "L'alpabet sogdien d'après un témoignage du XIIIe siècle", in: *JA*, mai-juin 1913, pp.521–33 参照)と an-Nadīm によるアラビア語の著作 Kitābu 'l-Fihrist(10世紀終わり)に言及されたものがある(B.Dodge, *The Fihrist of al-Nadīm*, New York and London, 1970, I, p.33 参照)．

(36) P.Zieme, *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang*, Budapest, 1990, pp.347–50 及び拙稿『史学雑誌』第102編第4号(1993) 112頁参照．

字のアルファベットではあり得ない．しかも常用されない文字 d, t, ', q の形式は，ペンジケントで発見されたソグド文字のアルファベット表のそれと同じであり，これがソグド文字のアルファベットであることは疑いがない[37]．文書からこの資料の時代を特定することはできないが，用いられている字体は乱雑に書かれた草書体ではあるものの，s と š は確実に区別できるからそれほど遅い時期のものとは考えられない．8世紀前後のものと考えて良いのではないだろうか．

奇妙なのは文字の配列で，ペンジケントで出土したものでは文字をアルファベットの順に連続して書いているのに対して，この断片では1文字1文字が別々に，短冊形の紙の短い辺に沿って3文字ほどずつ不規則に書かれていて，アルファベットの順番を知ることは必ずしも容易ではない．図版 (**Pl. III**) との比較を容易にするために下の転写では，文書での相対的位置が把握できるように翻字を配列し，アルファベット中の順番を右肩に添えておいた．

(')^{1} d^{4} z^{7} x^{8} k^{11} m^{13} '^{16} c^{18} r^{20} pδt

(ß)^{2} h^{5} ṭ^{9} n^{14} s^{15} š^{21}

(γ)^{3} w^{6} y^{10} δ^{12} p^{17} q^{19} t^{22}

このアルファベット表のもう一つの特殊性は，22番目の文字の後に pδt と読むことができる3文字が添えられていることである．本来の22文字の後に付加された文字としては，従来ペンジケント出土の表の δ，及びイスラム時代の史料中のリストの θ, x, δ の3文字が知られていた．これはそのどれとも一致しない．この種の付加要素が何を意味するものかについては，Livšic によって一つの解釈が提出されている[37]．彼はアラム文字に由来する22文字うちで，1文字が2つないし3つのソグド語の音素を表すような文字が付加されているのであり，当該の字形がアルファベットの本体の中で持つ音価以外の音価を持つことを示すものだと考えた．付加された文字の音価が明確に示されているペルシア

(37) 上記注 (35) に引用した Livšic の論文を参照せよ．

語史料の場合には，アルファベット本体では８番目の文字はアラビア文字の hē に対応するものとされており，付加要素では khē に対応する．また12番目の文字はアラビア文字の lām の音価を持つのに対し，付加要素では thē 及び dhē の音価を持つ[38]．ペンジケントのアルファベットの場合について彼は，アラム文字の l に由来する文字 δ が有声と無声の摩擦音 [δ] と [θ] を表すことから，後者を表記する文字として δ が付け加えられたとしている．

一方 Sims–Williams はペンジケントのアルファベットの最後に付加された文字 δ について，それがアルファベット本体の文字とは異なる音価を示すものであると解する点では Livšic と同じだが，その音価は [θ] ではなく [l] であるとした[39]．彼は文字 δ が表記する発音（[l], [δ], [θ]）のうち，[δ] と [θ] の違いはソグド人にとってそれほど重大ではなかったとする．またウイグル文字のアルファベット表でも，末尾に文字 l が付加されていることにも言及する[40]．

このように結論にやや違いはあるものの，本来の22文字の後に付加された文字を，文字が表す発音の点から説明する点で Gauthiot，Livšic 及び Sims–Williams の３者は一致している．従って我々の資料の pδt もその方面からの説明を模索すべきかもしれない．実際ペルシア語史料が伝える３文字のうち [f] と [θ] は，各々文字 p と δ によって表記される．しかし一方で，[x] は説明され

---

(38) この点では Gauthiot も類似の解釈をしているが，具体的な音価についての解釈は異なる．Gauthiot の研究はソグド語学の最初期のものであり，特にソグド語の音韻体系についての理解は現在のそれと相当異なる時代の産物なので，ここでそれについて論じることはしない．なお Gauthiot は Fihrist の掲げるソグド文字の総数が24文字（文字 n が脱落しているとする）のに対して，Livšic は25文字であるとする．後者の説を支持すべきであろう．

(39) Sims–Williams, “The sound–system and the origins of the Uyghur script”, in: *JA* 269, 1981, pp.347–60 特に pp.349–50 参照．

(40) 彼は８世紀の書記者が，ウイグルのアルファベットをまねて，最後に[l]を表す文字 δ を添えたのかもしれないとも言っている．しかし８世紀に既に，ソグド文字に由来するウイグル文字によってウイグル語（ないしは古代のチュルク語）を組織的に表記することが確立されていたかどうかは不明であり，この考えをそのまま受け入れることはできないと思う．

ないままである．さらに図版からも明かなとおり，pδt の３文字は続け書きされており，先行する22文字とは全く異なる扱いを受けている．これはまたペンジケントのアルファベットや，イスラム史料に於いて付加された文字の場合とも相違する．これらのことから判断して，我々の資料の pδt は発音を表す文字を列挙したものではない可能性が高い．しかしながらその意味するところは，不明とせざるを得ない．(41)

4 広東出土の銀器にみられるソグド文字の銘文(42)

1984年９月29日，広東省遂溪県附城区辺湾村で，金銀器が秘蔵された陶器の壷が発見された(43)．そのうちの１点に銀製の碗があり，その外側の縁にはアラム

---

(41) ウイグルのアルファベットに付加された１以外の文字は，Zieme によれば ž, m, q であるが，彼は ž 及び q についてはアルファベット本体の文字とは異なる発音を表すものと考えているようである．Zieme, *op. cit.*, pp.349–50 参照．一方 m のほうは，語末の字形を示すものと考えたのかもしれない．筆者自身は，付加された文字は š, m, x であり，これらがアルファベット本体の文字とは異なる発音を表す文字であると見なすことはできにくいと考える．なお３文字の内の最初のものは Zieme の Alphabet 1以外ではすべて š（ただしこれは文字 s と区別できない字形）である．またAlphabet 1でも z の読みは必ずしも確実ではない．この点については G. Clauson, *Turkish and Mongolian studies*, London, 1962, pp.107, 180–81 も参照せよ．

(42) ここで扱う銀器に関する報告が発表されていることを，筆者に教示された東海大学の春田晴朗氏に感謝する．

(43) 遂溪県博物館「広東遂溪県発現南朝窖蔵金銀器」『考古』1986年第３期243－46頁．中国ではこれ以外にも何点か，ソグド文字の銘文を持つ銀器は発見されているようである．そのうちの１点は，銘文の模写が発表されている．『唐代金銀器』文物出版社（1985）No.111参照．これは１語で -ßntk「奴隷」で終わる人名であるが，ßntk に先行する要素はよく読めない．もう１点は未発表で，新疆ウイグル自治区巴州文物保存管理所が保管している．筆者は荒川正晴氏の好意により，その銘文の拓本をみることができた．銘文は銀器の所有者と重量を古風な文字で書き記している．そのうちの１語は Sims–Williams によって引用されている．Sims–Williams, *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus*, II, London, 1992, p.49 (s.v. δrsmt) 参照．この同じ巴州文物保存管理所が保管する別の銀器にも銘文があるが，それはソグド語ではない．林梅村がソグド語とするのは誤解である．『楼蘭王国と悠久の美女』朝日新聞社（1992）No.328及び176頁参照．筆者はカローシュティー文字の銘文（重量を表す数字）と考えるが確信はない．中世ペルシア語かもしれない．

系の文字が書き込まれている．これは筆者の解読により，ソグド文字・ソグド語の銘文であることが判明した．ここではこの銘文について扱う．

この銀器は陶器の壷の一番上にあったために破損が著しく，その破片のすべてを回収できないため，復元しても完全な形にはならないという．円形で縁が12の花弁状をなしているこの碗は，高さが8 cm，上部の最大の直径が18cm，底の部分が7 cmである．外側には小さな花の模様がある．ソグド文字の銘文は縁の外周のおよそ半周を占める．(44) 壷が埋蔵された時代は，別に発見されるササンの銀貨から推測されるという．全部で20枚，4種類の貨幣がある．報告者は各々をI–IV式と名付け，I式はシャープールIII世(383–88)，II式はヤズデギルドII世 (439–57)，III式はペーローズ (459–84) のA型，IV式は同B型であるとする．(45) これによって資料の上限が知られ，それと埋蔵までに経た期間を勘案して，南朝後期に埋められたものであろうとしている．ソグド文字の字体は模写で判断する限り，8世紀の文書のそれに比べて確かに古風であり，この時代判定と矛盾しない．(46)

次に銘文の解釈に移る．解読の鍵は最後の部分で，ここには通常重量が書い

---

(44) 報告者は中世ペルシア語の銘文とするが誤解である．しかし姜伯勤は下記注(52)で言及する論文で，これが中世ペルシア語ではあり得ず東イラン地区で使われていたアラム文字であるとして，ソグド文字である可能性を示唆している．ただし彼自身は解読の試みはしていない．

(45) 報告の中の模写によって判断する限り，4種類はすべてペーローズのものに見える．I－IIIでは王冠に翼が見えないのでゲーブルの分類によるII式，IVでは翼が見えるのでIII式であると考えられる．なお下位分類は確実ではないが，I及びIIIはII/2，IIはII/3，IVはIII/1に分類されるだろう．この分類に関しては R.Göbl, *Sasanian numismatics*, Braunschweig, 1971 参照．なお桑山正進氏は，これら4種類がすべてペーローズの貨幣であるとする筆者の考えを確認して下さった．ここに記して謝意を表す．

(46) 筆者にはインダス河上流域で発見される碑文の字体に近いように見える．これらの資料に関しては N.Sims–Williams, *Sogdian and other Iranian inscriptions of the Upper Indus*, Vols.I–II, London, 1989–92 参照．これらの碑文の文字は，4世紀初めのいわゆる「古代書簡 (Ancient Letters)」に近い．Sims–Williams, *op. cit.*, Vol.I, p.8 参照．

てある．実際，20を表す数字が2つ（つまり40）あることは明かで，それに続く5文字から成る語は重さの単位であるに違いない．用いられる単位は早い時期ではスタテル，後期ではドラクマであることが知られている．文字の形式からドラクマ(δrxm)と読むことは不可能で，全体は styrk と読むことができる．styrk は styr に接尾辞の k が付加された形式で，スタテルを意味する．別に接尾辞 –c が付加された styrch という形式も，4世紀初めのいわゆる「古代書簡」では知られている．

数字の40の直前にある2つの文字のようなものは，1の位の数字で2を示すものであろう．通常ソグド語の数字では1の位の数は10の位の数の後に書かれるが，逆になっている場合があることが報告されている．(47) 2つはどちらも n ないしは w のような半円形の文字で，ZY と読むことは全く不可能である．

ところで，スタテルを意味する styrk はもう1例，ペルムで発見され帝政時代にエルミタージュ博物館に入った銀器の銘文にも見いだされる．この銘文は最近では Livšic と Lukonin によって研究された．(48) 奇妙なことにそこでも1の位の数字が10の位の数に先行するという．またその銘文の字体は「古代書簡」のそれに似ているといい，この点でも広東出土の銀器の銘文と一致する．一致はそれだけではない．広東の銀器の銘文では数字の直前に，文字には見えないデザインがある．(49) それに先行する部分には，所有者の人名や称号が期待される．この部分の模写された14個の文字には，語の切れ目らしいものは見あたらないが，終わりの9文字は c'c'nn'pc と読むことができる．ただし n と p の読みには不安が残る．特に p は w のようにも見える．ところでペルムの銀器の銘文でも，Livšic と Lukonin は数字に直接先行する部分を c'c'nn'pc と読んでいる．彼らも n の読みに不安があるらしく，w の可能性もあるとしている．比較

---

(47) Livšic, *op. cit.*, p.256, n.2 参照．そこではこの配列はブハラ式と呼ばれている．

(48) V.A.Livšic and V.G.Lukonin, *VDI*, 1964, pp.170–72 参照．

(49) このデザインが何を意図したものか分からない．所有者のマークのようなものであろうか．ちなみにペルムの銀器にもタムガが見えるという．Livšic and Lukonin, *ibid.* 参照．

を容易にするために2つの銘文の転写を掲げておく．

(a)]...sp c'c'nn'pc <tamgha?> ii xx xx styrk

(b) my'rh''w/n c'c'nn'pc iii iii iii xx x styrk[50]

2つの銘文の一致は偶然ではありえず，同じ時代同じ工房で作成されたものであろう．なおペルムの銀器の重量は636グラムであるが，全体の20分の1程度が破損によって失われているという．このことから styrk が，確かにスタテルを表していて，ドラクマに対応していないことが分かる．[51]

c'c'nn'pc は Livšic and Lukonin によれば，チャーチすなわちタシュケントと関連する一種のあだ名であろうという．n'p は「人民，国民」を意味するので，全体を字義どおり訳せば「タシュケントの人民に関わる」となるとする．この理解は基本的に正しいと思われるが，広東の銀器では先行する部分はペルムのそれとは明らかに異なるので，異なる固有名詞にこの同じ語が後続していたことになり，あだ名というより称号あるいは出身地を表す語であった可能性の方が高いと考える．

ここでの議論はすべて銘文の模写に基づいている．筆者が斉東方氏の手を煩わせて入手し得た写真では，銘文はまったく見えない．その意味ではこの研究

---

(50) この銀器と銘文の写真は Ja.I.Smirnov, *Vostočnoe serebro: Atlas drevnej serebrjanoj i zolotoj ...*, St.Petersburg, 1909, XXV, 53 にある．筆者は田辺勝美氏の好意により，この部分のコピーを入手することができた．比較してみると2つの銘文の字体は確かに酷似している．また E.Herzfeld, *Kushano–Sasanian coins,* Calcutta, 1930, p.23 にも銘文の模写が掲載されており，それを利用することもできる．Herzfeld の本の利用を可能にして下さった熊本裕氏に感謝する．なお Livšic と Lukonin が h と読もうとする文字は，奇妙な外見ではあるが x と読むことができる．この字形に関しては V.A.Livšic, K.V.Kaufman and I.M.D'jakonov, *VDI*, 1954, no.1, p.153 にある，ブハラ文字の x の形も参照せよ．従って全体は my'rx''n と読まれる．my' も rx''n もソグド語の人名あるいはその要素として在証されている．Sims–Williams, *Upper Indus* II, pp.57, 68 参照．

(51) コレズム語の 'strk がディルハムを意味することから，styrk もドラクマに対応するのではないかと考えるむきがあった．Henning, "Mitteliranisch", in: *Handbuch der Orientalistik*, I/IV/1, Leiden–Köln, 1958, pp.20–130 特に p.53 参照．

は，資料の存在の報告以上のものではない．今後は写真ないしは実物によって研究を進める必要があり，この短い報告がその引金になれば幸いである．(52)

5 pyškwr と卑尸屈

かつて R. Göbl が発表したコインのなかに，ペーローズの銀貨の模造品でトカレスタンの北部で流通していたものがあり，そこにはいわゆるカウンターマークが押捺されていた．彼はそれをバクトリア語であると考え一応の解読を提案している．(53) この同じカウンターマークはモスクワにある国立歴史博物館が保管する，ペーローズの銀貨の模造品にも見られる．最近 S. D. Loginov と A. B. Nikitin は後者の銀貨のカウンターマークの拡大写真を発表し，あわせてその読み（pyškwr あるいは pyšrwk）も提案している．彼らによれば，これはササンの銀貨の模造品にしばしば見られるソグド文字によるカウンターマークと同様，西トルキスタンの支配者の称号あるいは名前であろうという．またこの同じカウンターマークの崩れた形はメルヴで発見されたカワード I 世（484, 488–97, 499–531）のコインにも見られるという．(54)

---

(52) この種の隋唐以前の金銀器が広東で発見されることは，ソグド人が南海貿易にも進出していたことを示唆し，東西交渉史の上からも興味深い．姜伯勤は既に「広州与海上絲綢之路的伊蘭人」（『広州与海上絲綢之路』広東省社会科学院 1991年1月，21－33頁）と題する論文を発表し，この問題を扱っている．この論文のコピーは池田温氏の好意により入手することができた．そこでは触れられていないが，わが法隆寺旧蔵の8世紀に将来されたと考えられる香木にソグド語の焼印があり，それとイスラム史料を使って，ソグド人の南海貿易について論じた論文に，家島彦一「法隆寺伝来の刻銘入り香木をめぐる問題」（『アジア・アフリカ言語文化研究』37号（1989）123－41頁）もある．

(53) R.Göbl, *Dokumente zur Geschichte der iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*, Wiesbaden, 1967, Bd.II, p.142, Bd.III, Tafel 75, 283/b, 1, 7, and Bd. IV, Tafel 9, KM 115 参照．

(54) S. D. Loginov and A. B. Nikitin, *Mesopotamia*, Vol.28, 1993, pp.274-75 with Fig.16: A 参照．ちなみに彼らが言及する称号には tkyn「王子（チュルク語）」δšcy ßγy「創造神」xwß「王，領主」がある．

問題のカウンターマークの正しい読み(pyškwr)と，それが称号というよりむしろ支配者の名前らしいことは，トルファンのアスターナ出土で，高昌国時代の売買税である称価銭を記録した文書に現れるソグド人の人名から推測される．この文書によれば麹氏高昌国時代のある年に，2人のソグド人曹迦鉢と何卑尸屈は銀2斤を売買し，称価銭2文を納入した．[55] 迦鉢の原語は不明だが卑尸屈(中古音：pjie śi k'i̯ət)のほうは，カウンターマークに現れた pyškwr と同じ名前であることは明かである．つまりソグド語には従来知られてはいないが，pyškwr という人名が存在していて，ある時代(おそらく6世紀)のソグディアナを含む地方の支配者はその名前であった．彼は模造した銀貨に自分の名前を押捺して流通させていた．[56] またその同じ名前を持った何国(クシャーニヤ)出身のソグド商人が，7世紀にトルファンで交易を行っていたことになる．

類似の事例は，ペンジケントの中国式方孔銅貨に表記された支配者の名前にも見られる．O. I. Smirnova はその名前を称号とともに，pncy MR'Yn 'm'wky'n と読み，'m'wky'n は cm'wky'n とも読めるとしている．[57] 後者の読みのほうが正しいことは，敦煌にあったソグド人集落従化郷の8世紀中葉の差科簿に現れる人名の康之目延から推測される．[58] 彼の名前の之目延(tśi mi̯uk i̯än)が，貨幣に見られる王の名前の cm'wky'n と同じであることは明らかである．

---

(55) 「吐魯番出土文書」第三冊 北京 文物出版社(1981)318頁及び，姜伯勤「敦煌吐魯番文書与絲綢之路」北京 文物出版社(1994)175頁参照．「吐魯番出土文書」第三冊には，7世紀前半の唐の西州時代以前の文書が収録されており，ここで言及した文書もその時代のものである．

(56) 残念ながら6世紀頃と考えられるこの支配者の記録を，筆者は漢文の史書のなかに見いだすことができなかった．無論この時代ソグディアナを含む地域はエフタルあるいは西突厥の支配下にあったので，現在のところソグド語で語源を解明できないこの名前が，本来エフタルないしはチュルクの人名であった可能性もある．

(57) O. I. Smirnova, *Svodnyj katalog sogdijskix monet*, Moscow, 1981, pp.46–47, 230–32参照．なおこの貨幣に関しては，沖田宏之氏が大阪大学文学部に提出した平成6年度卒業論文「七・八世紀のソグディアナ出土銅貨についての考察」も参考にした．

(58) 池田温「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」「ユーラシア文化研究」1(1965)49－92頁(特に65頁)参照．